

信仰生活の基礎事実

Hペソ六・一〇・一一

生物は必ず死滅する。人間もまた死ぬという事実の前に、人間はいかにかして死なぬものを望んでやまない。永遠なるもの、不滅なるものを探求してやまない。真理を求め、芸術を極め、智識を捜すのである。そして自己において決して死なぬものを握り、ついに自己は死なぬという確信に生きんとするのである。永遠不滅にして、在りて在るもの、常に生きるもの、すなわち限りなき生命を得んとするとき二つしか道はない。おのれ自身の悟性において限りなき生命に至るか、生ける絶対の創造主なる神に生かされるかである。おのれ自身が死なぬものとなるか、永遠に生きる者に生かされるかである。

「蛇、婦に言けるは汝等かならず死ぬ事あらじ、神、汝等が之を食ふ日には汝等の日開け汝等神の如くなりて善惡を知るに至るを知りたまふなりと」（創世記三・四・五）人間の多くは神によらずして、血肉自身神のいとへなりて善惡を知らん事を願い、死なぬ道を発見せんとしている。これは蛇すなわち悪魔の大なる誘惑である。被

造物の最大の誘惑であり、危機である。古来かかる道を歩んで永遠の生命に至つたものはない。

「それ神はその独子を賜ふほどに世を愛し給へり、すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり」（ヨハネ三・一六）ここに亡びずして永遠の生命を与えられる道がこの人生に備つてゐる。すなわち、神を信じ神に生かされ、神のひとり子主イエス・キリストの十字架の血に救われた歡びに生きる道である。

普通真理に生きるとか、悟るとかいう様な自己のひとり角力に満足する道ではなくして、イエス・キリストの愛に感激して生きる道である。「されどさきに我か益たりし事はキリストのために損と思ふに至れり。然り我はわが主イエス・キリストを知ることの優れたるために、すべての物を損なりと思ひ、彼のために既に凡ての物を損せしが、之を塵芥のごとく思ふ。これキリストを獲、かつ律法による己が義ならで、唯キリストを信ずる信仰による義、すなわち信仰に基きて神より賜る義を保ち、キリストに在るを認められ、キリストとその復活（よみがえり）の力とを知り、又かの死に倣（なま）ひて彼の苦難にあづかり、如何にもして死人の中より甦へることを得んが為なり」（ピリピ三・七・一一）と使徒パウロが書き遺されし通りである。

元來、人間が死をも恐れぬという場合は、必ず人格的関係においてである。主従関係に、親友関係特に戦場の戦友関係に、恋愛関係に、親子兄弟の肉身関係において愛の神祕は解く術もない現実を我らに示す。決して真理を確信し、芸術に捧げた訳ではないが、かかる感激は人生の常に繰返す出来事である。信仰は、かかる人格的関係を通じて永遠に生きる道を与えるものである。イエス・キリストの御人格と十字架の聖愛に打たれて、我らの生活は一変する。自己を中心として転回していたものから、イエス・キリストと父なる神の愛を中心として人生

のすべてが転回し、また解決せられ、感激はイエス・キリストとその十字架の外には何事も知るまじと思い定め
る、に至るのである。

信仰生活は、かくの「」とき感激、すなわち人生の価値転換、おのれに生きず、キリストによって生きる生活、
いわゆる回心の歡喜によつて生まれ変る。新らしくイエス・キリストの中に造られ、神の喜び給う善き業に歩む
ことの希望がその生活に満ち満ちて来るのである。色々と悩み、苦しみ、忍耐し、努力して、つゝに、意を決し
て神と人との前に洗礼を受け、信仰生活に入ったときに、大なり小なり、かかる経験を我らは持つのである。

けれども残念な事には、やがて、かかる信仰生活の決心は、現実の社会生活、精神生活において、次から次へ
と起つて来る困難な問題を解決出来るかといふと、なかなかそうはゆかないのである。むしろ、想像もしなかつ
た困難な、また今までに自己の身邊に経験しなかつた厄介な現実が迫つて来るし、過去においては氣にも留めて
なかつた心の不安が、すなわち罪を犯すにはあらざるかといふおびえが懼（りつ）然として心中を往来したのである。
心の平安と生活の安定を得んと願つっていた信仰生活が、かえつて自信のない不景気な臆病な生活に追い込まれ
勝ちになり、常に脅迫を受けているような生活中墮して行くように感ぜられるのである。

信仰生活に入り、神に救われたという喜び、人生の眞実に生きたと思う喜びは、何者にも替え難い歡喜法悦で
ある。その当座、全く宗教的な激情の興奮状態になるのが常である。しかし、やがて、その興奮が沈静するとき
に内的な色々な問題に悩んで來るのである。

教会生活にはいったといふ事は、深い意味において、神によつて新しく生まれたのであり、「人あらたに生れず

ば、神の国を見ること能はず」、「その反対が成就した事なのであるから、古き我は今死んで、主イエス・キリストの占領が、わが内と外に始まるのである。靈の力が肉の力とわが内にあって、大なる争闘を開始するのである。

肉的欲望のなくなるのが信仰生活ではない。戦わせしめられるのが信仰生活である。教会生活にはいったからといって、直ちに、その人の罪の問題が如実に解決されたと確信するまでには、永い絶えざる靈肉の戦いがあるのである。信仰生活にはいったといって、直ちに清まり、人格が向上し、罪より逃れた事にはならない。信仰の歡喜を失い、主イエス・キリストのお姿から自分の足下に目を落した瞬間に、我はただの人間に落ちるのである。

イエスが海の上を歩んで、ガリラヤの海にておる弟子の舟に近づき給いことを、ペテロは海の上を歩んで彼のみもとに近づいたのである。「来れ」と言ふと、ペテロは舟より水の上を歩いてイエスのもとにへゆく、しかるに風を見て懼(おそ)れ、沈みかかりければ、叫びて言つ「主よ、我を救ひたまへ」イエス直ちに御手を伸べこれを捉えて言ひ給つ「ああ信仰うすき者よ、何ぞ疑ふか」私たちは教会生活に入り、イエス・キリストの弟子となつても、やはり。ペテロと同じ道を幾度もその生涯に繰返すのである。

自己自身の決心では、決して信仰生活を進めて行く事は出来ない。自己自身の意志の力によつて信仰生活を推進するならば、かえつて、その反対に信仰から離れてしまつ。生ける父なる神の業として、救い主イエスの聖靈の力によつてのみ、信仰生活は自己の生活の中に打ち建てられて行くのである。

人間は生きている間欲望がある。性欲も食欲もとることが出来ない。性欲のあるという事が罪ではない。キリスト者の陥る誘惑は、性欲も食欲も運動も遊戯も、何もかも罪だという錯覚に陥ることである。病的信仰であり、神経衰弱である。

信仰生活が進んでいるか、退いているか、これを失つてしまつてしているか、キリスト教の信仰に生きているか、キリスト教を教義的に理解しただけに終つているかは、いかにして分かるかと云ふと、それは、主イエス・キリストと人格的におのれ自身がいかに関係しているか、主イエス・キリストの弟子として、彼の御足跡を歩まんとする情熱が、愛の関係が、彼との間に深くなつていてかどうかによって分かるのである。

信仰生活に入るといつ事は、人生の難問題がことごとく解決されると安易に考えている人たちは、イエス・キリストの家族になつた以上には、イエス・キリストの負い給つた重荷をも、また、自分が担わなければならぬといふ事を、現実に周囲から、また、内なる生活から知るときに、今さらのことに驚くのである。キリストの重荷、教会の重荷を自分もまた分担するものである事を発見して驚愕（きよがく）するのである。

「凡て労する者重荷を負ふ者、われに来れ、われ汝らを休ません。我是柔軟にして心卑（ひく）ければ、我が軛（くびき）を負ひて我に学べ、さらば靈魂に休息を得ん。わが軛は易く、わが荷は軽ければなり」これはイエス・キリストの約束であると共に、「それ我が来れるは人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑（じゅうご）より分たん為なり。人の仇は、その家の者なるべし。我よりも父または母を愛する者は、我に相応しからず。我よりも息子または娘を愛する者は、我に相応しからず。又おのが十字架をとりて我に従はぬ者は、我に相応しからず。生命を得る者はほ、こ

れを失ひ、我がために生命を失ふ者は、「これを得べし」といふことは、また、イエス・キリストの我らにハツキリと知らしめ給いし約束なのである。

信仰生活にはいつて、この約束が如実に毎日の家庭生活に、勤先の生活に、友人との関係に、明らかに迫つて来る場合、多くは失望し、確かに落胆する。その迫害の事情によるよりも、これに処する血肉の信仰の実体、自己の無力についてである。イエス・キリストはその生涯において、誘惑され、迫害を受け、家族の者より誤解され、罪人より罵(ののし)られ、彼の教えを受容れない宗教的な人々より嘲笑され、そして、その弟子と称する数百人の者どもは彼のもとを去り、わずかに少数の友の一群众しか、そのもとに留まらなかつた。後には、彼らすらも、彼を見棄てて逃げ去り、ピラミッドの審判の座の恐るべき廟(あさけ)りを通して、ついに、彼ひとり、カルバリーの丘の十字架に進み給つたのである。

かく主は我ら人類の、そして我らの罪を救わんため、その贖(あがな)いとして苦しみ給つたのであるから、我々もまた、主と共に苦しみを共にするべきものであり、その苦難にあずかることを永遠の生命に至る神聖なる特権として喜ぶべきであり、信仰はそれを全うする力であるのである。

キリスト者になつたのは、恍惚(じょうごつ)的法悦と歓喜が感情的な波動をもつて、生活を絶えず流れ出ることではなくて、キリストと同じ苦難の生涯に入り、キリストを知らない他の人々よりも高き永遠の世界に生活せんがためである。ここに、我らに対し、いかにかして肉の世界に引戻さんとする惡の勢力が襲い来るのである。「我いま人に喜ばれんとするか、或は神に喜ばれんとするか、抑もまた人を喜ばせんことを求むるか、もし我なほ人を喜

ばせをらば、キリストの僕にあらじ」聖書の示すところである。

信仰生活が向上しているかどうかは、自己自身において難行苦行をし、修養練磨して、確信を得ることではなくして、自己自身がイエス・キリストを慕い愛し、その道に歩まずにはおれないために、周囲から、またこの世から分かたれ、神の自由に生かされるために、この世の迫害と嘲罵（ちようば）と拘束と不自由を自ら加えられる事実によって知られるのである。信仰生活の基礎として、かかる事実が我らの生活に示されて居るかどうかが、教会生活を忠実にしているかどうかである。

かかる意味において、キリスト者の道は狭き門であり、茨の道である。

信仰生活の初步において、必ず眞面目で正直にひたむきに進むときに、思いがけない十字架の道がその生活の基礎事実として迫って来るときに、何よりもその助力を教会に、兄弟姉妹に求め、教会生活に頼らんとするのは自然である。しかるに教会の内部において、かかる兄弟に対してもかかる助力を与えるか、もしも礼拝が形の「」とく行われ、隣人は黙々として他人の事は知らず顔に、みんなの顔ほどれもこれも信仰の奥儀に達したような顔付で納まっているときに、だれに自己の信仰上の悩みを打明けてよいか迷うのである。

修養談や、克己鞭撻や、教義の解釈や、即興的な説教は決して信仰の助けとはならずして、教会から遠ざける役目をなすのみとなり、教会組織の人的、団体的の因習は、いたずらに混濁した空氣をかもして、社会と共に通な人間憎悪の別社会を思わせるにすぎないことが間々ある。信仰生活の危機が内から外から囲繞（いじょう）するといわねばならない。

かかる時、我らは決然として、新鮮な血液の注入、深呼吸をしなければならない。魂の肺腑に、聖靈の働きを受けねばならない。それは祈祷（きとう）である。祈祷の実践である。

信仰は神とおのれとの関係において、キリストと我との人格の関係においてである。教会とキリストの関係においてである。キリストの福音と我との関係、キリストよりの救いと愛との関係においてのみ成り立っているのであるから、当然に、神と我、キリストと我との間に会話がないはずがない。神の家族の間に会話のないはずがない。教会の中に祈祷の喜び、祈祷の拡充する勢がないという事は、家庭内に会話がなくて互いに黙々として暮していることに過ぎない。そんなところは家庭ではない。

祈祷は独語ではない、修辞ではない、泣ことではない、挨拶だけではない、台詞（せりふ）ではない。父なる神と、子なる我との対話である。父なるがゆえに、神が必ず応答し、愛し、導き、解決し、力づけて下さる。神が味方し給う事実なのである。祈祷のない信仰生活はない。呼吸作用のことぐ、無意識に祈祷は行なわれていねばならぬ。

時には、意識して深呼吸も必要である。朝早く、外に出て呼吸せねばならぬ。室の内で、無精たらしい祈祷では足りない。祈祷において、兄弟姉妹は交り、即ち教会生活があるのである。祈祷をもつて礼拝に出席したときには、祈祷をもつて連る教員とは、黙々としていても、一つの恵み、一つの聖靈に満たされ、一つの信仰に結ばれるのである。また説教者をして福音を述べしむる力をさえ加えられるのである。神の満つる教会が地上に建つのである。天国は地に成るのである。天国の姿が教会にほの見えるのである。

祈祷は実践の外はない。理屈はない、実践すればよい。声を出して、ひたすらに、朝に晩に、父なる神、天地

の創造主、イエス・キリストの父に呼びかける、ただそれだけである。毎日毎日繰返す。神に、なんでも正直に打明ける。言葉に出して打明ける。それでよい。必ずやそこに神の力を与えられ、すべてが解決せられる。イエス・キリストの道を歩むことが出来る。それが事実である。信仰生活の基礎事実である。

極端に言えば、人生においては、キリスト、すなわち神と我との間の関係の外に絶対なものはない。永遠のものはない。その解決は死の解決である。されば、神と交わる、すなわち祈祷の外に生活の本質はないのである。人生は祈祷の戦場である。

かかる基礎事実に立つて、初めて国を愛し、人を愛し、國のために、隣人のために、生命を捧げることが出来るのである。

祈祷の人こそ、無意識に神によつて動き、神のことく愛に生き、無欲になり、柔軟になり、心清く、正義に強く生き得るのである。

私は、もつともつと祈祷深くなり、キリストのお足跡を慕つて生きて行きたく願つてゐる。私の信仰生活の基礎が、世に喜ばれずとも、祈祷のうちにのみ、眞実でありたいと願つてゐるものである。

(年月日不詳)